

「構造主義者論争」

(‘MacCabe Affair’)

瀬 良 邦 彦

序

『英語青年』の八月号(1992)にケンブリッジ大学で起きた「デリダ事件」の報告の中で、報告者は当大学の保守性に言及しながら、「デリダというシニフィエを巡るイデオロギー闘争というところだろうか。あるいはまた、読者におもねることもなく、*defférance*, *logocentrism*, *aporia*といったキーワードを駆使するフランスの知的言説に対しての、経験主義・実証主義に拠って立つイギリスの魔女狩りと理解していいのだろうか」と括っている。この論稿で扱う「マッケイブ事件」は1981年に同大学で起きた。「構造主義者論争」とも呼ばれるこの事件はマッケイブ(C. MacCabe)個人の大学における任用の問題を孕んでいただけに、事は一層深刻であり、その後の動きを考えると、ケンブリッジ大学にとっての損失は大きかったと思われる。ただ、同大学の英文科の基本的体質、その保守性、あるいは体制・反体制の問題を論ずるかぎり、旧聞に属するこの事件を取り上げることに疑義があるかもしれないが、大学で何を教えるのか、事文学に関するかぎり、現代文学理論の大学教育における位置づけ、あるいは伝統的なカノン(canon)をどうするのかという問題を胎んでいるだけに、かつてのモダニズムのイギリス的な受容の仕方はさておくとしても、一つの大学の「栄光」と「汚辱」ととどまらない大きな問題であると思われるのである。

(1)

大学における任用の問題は、本来、一般の人々には無縁のはずだが、マスコミに漏洩され、*TLS*を含め、多くの新聞が取り上げるところとなり、

また「世界最良の英文科」と呼ばれるケンブリッジ大学英文科の問題だけに、必要以上に興味を引き、情報が混乱し、かえってその真相が見えなくなってしまった。

その中で、紛れもない事実は、マッケイブは任用されず、大学を去ったということである。この任用の手続きあるいは制度は、この大学独自のものであり、説明が必要だが、このたびは、実際に運用されただけでなく、その内容及び投票結果なども、漏洩の事実と係わりがあるのかは別にして、知られるところとなっている。

この任用制度は‘upgrading’として知られている。同大学にはassistant lectureshipというポストがあり、更新なしの五年間という期限付きのポストであるが、その任用が終了する時点で、Faculty Boardがこのassistant lecturerが任用されるpermanent lectureshipの創設を推奨する選択権をもつもので、昇進が認められるかどうかが問題となる。この制度の存在そのものが問題だとする意見もあるが、自動的に昇進が約束されるものではないだけに、「再審査 (review procedure) は苛酷」とする評もある。

このたびのupgradingを巡って、明らかになっている事実経過は、次のとおりである。まず、Faculty Boardは10対9で辛じてマッケイブの推薦を決めたが、Appointments Committeeは結果的には第一回目の投票で、マッケイブの言葉を借りれば、前例のない動きで、4対3で否決してしまった。しかし、第二回目の投票では逆に4対2（棄権1）でマッケイブに有利な結果になったが、昇進が認められるためには七票のうち五票が必要なので、結局マッケイブの昇進はならなかった。この間、マッケイブ支持のカーモード (F. Kermode) とウィリアムズ (R. Williams) の両教授（二人とも看板教授であった）が秘密投票でAppointments Committeeから締め出され、また同じく支持者であったヒース (S. Heath) とバレル (J. Barrell) の両氏がFaculty Boardから投票で締め出されるなど、カーモードの言う「事件のいわば政治的相」を露呈することになる。

この一連の事件の経過を見るかぎり、マッケイブに対する敵意はかなりのものであったと推察されるが、この敵意の底には一体何があったのか興

味を呼んだのは当然の成り行きであろう。もっとも、マスコミを巻き込むことになったのは、いずれにしても戦略的と言わざるをえない。ところで、問題の真相はなんだっただろうか。マッケイブの学者としての個人的資質が問題にされたのか、あるいは、他人を構造主義者呼ばわりするとき、その言葉に込められた誹謗の意味合いから察して、構造主義を教えたことが原因なのか、それとも、カーモードの言葉「ケンブリッジの教育はどこかおかしい」が暗に示すように、文学教育を巡る根本的対立があり、結果的には、ケンブリッジの排他的保守性を示すことになる象徴的事件がこの「構造主義者論争」と呼ばれる事件の真相なのだろうか。

ナイト (L. C. Knight) は新聞は状況を単純化し、否めて伝えていると不快感を示すが、その一方で、当事者たちの言い分は、まとまりは欠けていても、直接の言葉で伝えられており、その妥当性および背後にある思想は推測できる。TLSの特集記事でこの問題についての他の大学関係者の興味深い反応および知的風土を読み取ることも可能である。

「構造主義」および「構造主義者」という言葉、この事件のキーワードであり、単なるレッテルではないことは確かであるが、「当面の問題から注意をそらすためのもの」とする考えもあながち否定できない。確かに、これらの言葉が意味するものが明確ではないし、その用法も正確とは言えない。しかし、マッケイブの敵対者と見られる人々にとっては、その敵意の象徴、避けたい、係わりたくないものの象徴と見なし、広く解釈すれば問題は無さそうである。さて、実際に公になった敵対者とされた人々の言葉をとりあげてみたい。

グールド (T. Gould) によれば、リックス (C. Ricks) の論点は次のように要約される。マッケイブのケースは個人的なものであり、問題なのはマッケイブの「知力」である。それはイデオロギーの問題とは係わりはない。もっとも、イデオロギー論争があることは否定しない。しかし、二つは結びつけられるべきではない。デリダ対ドクター・ジョンソンという図式はマッケイブのケースとは無縁である。また、別の報告はリックスの「誰も英文科の中に構造主義者がいることには反対しない。しかし割合の

問題はあつた。我々の仕事は英文学のカノンを教え、守ることだ」という発言を伝えている。割合は35人中2人にすぎないと注を付けてであるが。一方、アースキン=ヒル (H. Erskine-Hill) はマッケイブの知的アプローチそのものが学問の世界における任用の妨げになっているとして、次のように言っている。「いわゆる新しい(方法)は学問の探究における証拠と蓋然性の妥当性を否定するところまでいくと考えられる。それは文学研究の途方もない退廃である。それは理論だと自己を偽る術語である。それが問題であるかぎり、その種の立場を奨める人は誰でも任用リストのトップに挙げられないと思う」。新しいもの一ここでは当然構造主義—に対する伝統主義者固有の嫌悪と危惧を垣間見ることができると思う。

構造主義をパリジャンのファッションに例えて、一時的な興味にすぎず、不可解と一蹴する人々の存在はさておくとして、敵意を生み出す英文科内の知的雰囲気、学問的立場の相違だけでなく、「ケンブリッジの英文学」を守ろうとする、ほとんど「宗教的」とも言える関心の存在を覗うことができる。したがってその敵意そのものの検証は不可能だとしても、ここに述べられた判断・批判の妥当性とその根拠となっている基本的前提、そして事実として語られたものについては検証は可能である。

一つの事実から始めたい。マッケイブは、自ら言っているように、構造主義者ではない。バーゴンジー (B. Bergonzi) によれば、彼はポスト構造主義者であり、その主な準拠体系は精神分析で、しかも修正主義フロイト派の精神分析であつて、一方、構造主義はすでに歴史の一部であり、このたびの論争は共通基盤をもたず、「論争」ではなかつたことになる。マッケイブも、自ら構造主義者と呼ばれたことについて、「敵は(そうすることで)構造主義と私自身の作品の双方についてその無知を曝け出した」と述べ、論争の真の問いは「どのように、どういふ方法で英語英文学を教え続けることができるか」であつたが、その答えは「学問としての英文学には何の問題も存在しない」といふ、あらかじめ容認されたものしかありえない論争だつたと想定している。

続いて、彼の「知力」についての疑惑に焦点をあてたい。昇進の条件の

一部に本の出版が挙げられているが、彼の場合、日本でも翻訳が出ているジョイス論『ジェイムス・ジョイスと言語革命』がその対象となったわけで、この書物が任用の際に問題視されるという皮肉な結果となる。この書物の書評・評価は大きく分かれ、異論のあるのは事実で、ケンブリッジ大学でも少なくとも二時間の論議があったと報告されている。書評が分かれるのは、日本とは違って、珍しいことではないが、この書物が急進的で攻撃的なものに映ったのはまちがいなさそうだ。高名なジョイス学者であるエルマン (R. Ellmann) は重要な書物で、今後のジョイス論の焦点となるとみているが、アースキン=ヒルには、その知的アプローチそのものが文学研究のデカダンスと映る。学問研究の暗黙の了解事項である「証拠と蓋然性の妥当性」を否定するものと見なすのである。また、バーゴンジーによると、この書物はパフォーマンスであり、刺激的だが、1981年の時点では「受容可能な多元論の境界を逸脱している」ということになる。

しかし、現実的には、このような論争が純粹に行われたわけではなさそうなので、それ以前の問題であるとする人もいる。カーモードによると、マッケイブがこの書物のかわりに、六冊のすばらしい本を書いたとしても、ケンブリッジには彼を受け入れる素地はなかったとし、英文科に関するかぎり、「ケンブリッジはあらゆる思想に対して敵対的である」と嘆いたが、これを文字通りに受け取ることはできないとしても、マッケイブの「知力」を問題にする以前に、敵意が存在し、それが理解を拒否していると思なすことが可能である。

マッケイブのトライポス (Tripos) のカリキュラム改革の仕事が一因であるとみる意見もある。ケンブリッジ大学のEnglish degreeは二つに分かれる。Part OneとPart Twoであるが、この場合、Part Oneが問題とされた。この最初の二年間のコースは伝統的な概論コースで、チャーサーから現代までの「English Literature, Life and Thought」を概観するものである。マッケイブによれば、このほとんど変えられずにきたコースに真の教育とイデオロギーの問題が存在するということになる。このコースで学生は600年の「文学」を読み通すことが期待されるが、もちろん、その「文

学」を作る素材の量については完全な合意があって、比較的少なく、しかも、大学に入る前にその素材に触れていることを前提としている。しかし、状況が変わり、文学批評は制度化され、その内容を多様なものにした。たくさんのもが読まれねばならなくなった。学生の質も変わった。以前の前提が崩れた中で、ヒースを中心に改革案が示される。Part Oneを一年に縮小し、その間に読みと分析の技術を訓練するというものである。しかし、Facultyは僅差ながら、これを退けた。推進者のひとりであった彼は、また、足場を失ったわけである。

(2)

以上の検証を通して見えてくるのは、マッケイブが追い込まれた窮状と、ケンブリッジ大学を知るものにとって、必ずしも理解しがたい、彼に対する敵意の存在であるが、同時に、イデオロギーと英文学はどのように教えられるべきかということに関して、対立の構造が浮かび上がってくる。これは一般に次のように定式化されたようである。「伝統主義者とモダニスト」、「革新主義者と保守主義者」、「保守主義者と実験派」といった具合である。しかし、どの定式も完全ではない。例えば、「多様なアプローチは保持するが、文学のカノンを守る」というリックスに対し、マッケイブ支持のカーモードといえども同意せざるをえないからである。また、マッケイブに言及するとき、イデオロギーを際立たせるためか、「マルキスト・構造主義者共鳴者」という表現が用いられるが、既に指摘したように、これは正確ではないし、構造主義も歴史の一部—自らを修正、脱構築して、ポスト構造主義の時代に入っていた。また、ブラッドベリー (M. Bradbury) の証言によれば、構造主義は新しいものではなく、唯一のものでもなかった。事実、構造主義は積極的に取り上げられ、約15年にわたって広く教えられたきた。もっとも、それはリアリズムに固執するイギリスの道徳的経験主義とぶつかり、物議を醸しつづける一方、還元主義の恐れはあったが、結局、文学研究を完全に混乱させるものではなかったとされる。したがって、これ以上この用語に拘りつづけるのであれば、「構造主

義」とカッコで括り、マッケイブが象徴する知的方向性を意味し、具体的には、「テキストの現象化」傾向を指すと見なすのがよいと思われる。再び、ブラッドベリーによると、1960年代までに、次々と定着しないまま、構造主義をはじめ、言語学、精神分析、記号学、マルキスト理論、受容論が、旧来の道徳ヒューマニズムに取ってかわりはじめ、それらの諸科学（理論）の哲学・ものの見方に由来・結果する“a socio-psycho-culturo-linguistic and ideological event”としての修正主義的理解としての「テキストの現象化」傾向を敵意と嫌悪を込めて「構造主義」と呼んでいると見なすのである。

ここで、「構造主義」という言葉を離れて、その言葉の下に隠されていたイギリスの教育的、実用主義的アプローチ（practical criticism）対理論的アプローチ（theoretical criticism）という本質的な定式を想定することが可能である。また、そうすることによって、この事件全体を蔽うリーヴィス（F. R. Leavis）の影をも取り込むことができる。リックスはある会合への出席を断るに際し、わざわざリーヴィスの言葉を引用して‘To come would be to condone’と言っているし、マッケイブは「リーヴィスの文学と言語がケンブリッジの文学と言語である」と言い切っている。イーグルトン（T. Eagleton）によると、「リーヴィスの主張はいまや英国の英文学研究の血脈と化している。地球が太陽のまわりを回ることへの確信のごとくゆるぎないものとなったリーヴィスの思想は、批評的判断を下す際について頼ってしまう英知のようなものと化した」。その影響力の大きさに目を見張る一方、practicalという言葉は、その批評がtheoreticalなものではないことを峻別するためにわざわざ選ばれたという事実は、今、コンテキストの違いはあるにせよ、興味深いものがある。

さて、カーモードが、リーヴィスの真の力は大学よりは「第六学年級」（the Six Form）において発揮され、そのため、大学では、「正答」を携えた学生はまず‘dis-educated’されなければならないと考える、リーヴィスの文学観・言語観を説き明かすことが必要だが、そのすべてを要約することは不可能だし、当面の問題に関する基本的考えをイーグルトンに拠り

ながら明らかにすることにとどめ、論を進めたい。

それによると、リーヴィスは、英文学を真摯な学問に仕立てあげる過程で、「文学趣味」に対抗して「厳密な批評的分析の重要性、ページの上の言葉に学問的関心を払う重要性」を説き、純然たる「文学的価値」に対し、「歴史と社会の総体的性質に係わるより深い価値判断と文学作品の評価が、密接な関係をもつ」と却け、限られたカノンでもって「偉大な伝統」と呼ぶ「英文学」を聖別し、その分析をすすめ、「文学研究を通して、豊かで、多様な、成熟した、識別力のある、道徳的に真摯な感性を育むことを目指す」と主張する。

この考えを拠り所として、一般に行われているとされるクローズリーディング（テキストを文学的・歴史的・伝記的連続体に差し込んで精読する方法）は成り立っていると見なされるし、「我々の仕事は英文学のカノンを教え、守ることだ」とするリックスの主張も説得力をもつことになる。

これに対して、マッケイブがリーヴィスの正当性を問題にした学者の一人と評価するウィリアムズ—左翼批評家でケンブリッジ大学の卒業生でもある一の見解を参照しながら、マッケイブが象徴していると思なされる文学観・言語観、少なくとも「構造主義」の底流にあって共通に理解されていると解されているものを明らかにしたい。

ウィリアムズは、ある学内の集会において、マッケイブを支持する立場から、英文科の歴史と伝統を要約し、問題の所在を明らかにする。まず、リチャーズ (I. A. Richards) とリーヴィスの影響から説きおこし、二重の伝統、すなわち、実用主義的アプローチと「Literature, Life and Thought」という二重の伝統の確立に言及しながら、その前提であるものを批判して、否定的見解を明らかにするとともに、「多元的アプローチ」を求める。

実用主義的アプローチは、明らかに、言語と経験の間に直接的な関係を想定する。したがって、文学と経験の間にも、時にはそれらが一つのものであるかのように扱うほどに、直接的な関係を想定する。言い換えれば、文学テキストを「真の精神史、我々の人生と社会経験の記録」と見なす。

理論的アプローチはこの関係を疑問視する。また、「Literature, Life and Thought」に見られる見方—文学を前景とし、他のすべてを後景とみる見方をも否定する。すなわち、「言語のコーパス、意識の歴史的瞬間、それが生み出された文学形式とかかわりなく、単一の作家、作品を研究することの正当性」に疑問をもったのである。さらに文学的創造を「人間活動の特権的、自律的範疇として取り扱う」ことを問題視した。

こうした疑問の根拠となっているのは、言語学における新しい理論であり、それが生みだした新しいアプローチの存在である。それによると、作家は、自らの人生や時代よりも、自らの無意識や言語の構造そのものによって、より影響される。マッケイブの表現を借りれば、「言語が主題よりも優位にある」、すなわち、著者はテキストを作り上げることに資する言語のシステムを意識的に支配するものではなくて、その無意識的な結果ということになる。したがって、著者の明白な意図は存在せず、テキストの意味は固定されず、テキストは人が意味を生産させるためには、どんな道具も適用できる物と化する。もちろん、これがマッケイブの立場であると言っているわけではない。彼のジョイス論はその書物の歴史的コンテキストを考慮に入れながら、フロイトの精神分析に拠りながら、その言語学的ルールを検討し、分析したものだ。また、もちろん、構造主義を説明したものでない。理論的アプローチを鋭く実用主義的アプローチと対立させる基本的な言語観とそれが生み出したアプローチの可能性を示したものにすぎない。

二つのアプローチは折り合うことはありえない。何れかの優位を主張することは難しい。我々は自らの言語観に立って選択しなければならぬ。あらためて、如何に英文学は教えられるべきかと問われて、「学問としての英文学には何の問題も存在しない」と答えるには、新しい言語観が持ち出す問題は大きすぎる。しかし、ウィリアムズの「多元的アプローチが必要である」という主張も無視された。少なくとも、結果的には、「如何なる歴史ももたない」英文学の「伝統」が勝利したかたちになった。マッケイブはStrathclyde大学の教授に任用され、カーモードも去った。そして数年

後にリックスも去るといふ結果に終わった。ウィリアムズは退官最終講義のなかで、「批判攻撃するほどのケンブリッジ英文科は、じつは存在しなかったのだ」といふ意味の発言をしたと伝えられている。川崎氏の言うように、この事件を巡って、どこかで深く事実をついたものと見なすべきだろう。

(3)

最後に、この問題に係わって、教育における現代文学理論の位置付けを巡る識者の意見をまとめておきたい。同時期に、*TLS*が特集したものである。予想されるように、現代文学理論を巡る評価は大きく異なる。もちろん、対立を解く処方箋は見当たらない。しかし、ケンブリッジという現場を離れて、この問題を一般的に論じることは意義があると思う。

スタイナー (G. Steiner) はマッケイブによると、大陸の言語と文学の新しいアプローチの解説と紹介をケンブリッジで行った人物であるが、彼は現代文学研究の中枢にテキストを ‘a complete object’ とみる考え、すなわち、その形式的・文法的特徴、意図と解説との関係でのその占める地位、その物質的、社会的コンテキストとの関係、その起源と受容の心理学が、批評家や文学研究者にとって、重要な興味の対象である ‘a complete object’ としてのテキスト観の存在を指摘し、このテキスト観に立ってはじめ、ヤコブソン、ソシュール、レヴィー＝ストロースなどの仕事を文学的反応と直接関係あるものにしており、現在、この流れのなかで、構造主義、記号論などの新しいアプローチの文学理論と解釈への影響はもはや無視できないとする。一方、こうした理解を示しながらも、脱構築のエピステモロジーについて、意図性と主題の概念を ‘autonomous textuality’ という概念で置き換えることには留保を示し、言葉と世界の関係を恣意的に壊すことを問題視する。

彼の立場は解釈学の伝統の中にあるが、自らclassicalという解釈学の伝統も、その文学教育が本質的にモノグロットであり、カント、ヘーゲル、マルクスとはほとんど無縁の感性の風土の中で育った人々の手に負えない

であろうと結論する。マッケイブ排除は、パロキアリズムは最後の逃げ場として計画されたものとうつり、事態を悪化させるだけだと見なしている。

ベイリィ (J. Bayley) の見解によると、英文科のような機関はパラドクシカルで決して安定はありえない。流行はその不安定の機能であるということになる。「流行」という言葉を使っているところに彼の本領が見えているが、まず、我々は文学を読むのはそれに対する態度を決め、それについて決定を行うことによって読むということの認識が必要であると断って、歴史的アプローチ (伝統的アプローチ) は学生により多く読ませることに利点があり、その学問的テーマは文化的、言語的連続性にある。一方理論的アプローチは、広く読むことよりは、それ自身の方法の重要性に関心がある。学生がどれだけ多く読みとおせたかは評価の重要な尺度であるはずだが、できるだけ多く読むことよりは、もっとよい方法があるにちがいないを前提にする理論的アプローチは、結局、時代の見方や精神に合うように、目的をもって更新された単一のテクニークに拠りがちに見える。ここに「流行」ということが読みとれるが、さらにすすめて、歴史を辿り、英文学をあまりにも真面目に考えすぎる制度・環境においては、「魔法の原理」(magical principle) が頼りにされがちであるとして、アーノルド、リーヴィスの例をあげる。特に、リーヴィスの「魔法」は大きな力を発揮し、ロレンスに基礎を置く文学コースこそ、人生と実際人がそのために生きるものについての真の見方を提供すると主張したが、その原理化の過程で、ある意味において、彼本来の人文主義者としての本能と趣向を犠牲にしたと見、その間隙をぬって、意図的に文学を非人間化し、「形式」、「コード」、「構造」によって評価する最新の「魔法」(理論的アプローチ) がもう一つの流行ということになる。厄介なことに、「魔法」はそれ自身他の「魔法」とは相容れないと考えがちだし、有効な交換可能な道具と見なされることは好まないで、英文科において、オープンエンドな歴史的アプローチと理論教育のクローズドショップの読みを調和させることは容易ではないということになる。選ばれた言葉のはしばしに伝統的立場に立つ姿勢が滲みでている。

ドノヒュー (D. Donoghue) の描く処方箋は二つある。一つは good taste はカノンへのアプローチがいつ perverse or deadening かを示してくれると信じて、英文学のカノンを教えることを主張することであり、もうひとつは pluralism と呼ばれる方法である。ボール (C. J. E. Ball) は英文科再編にあたっては、その目的、利用できる資源 (教師) とシラバスとの間にできるかぎり最高の等式を求めるべきだとする。ナイトは、かつてケンブリッジ大学の教授であった立場から、英語教師の主要な仕事は学生を励まして、広範な文学と直接—想像的、知的、学識のある—接触させることにあり、最新のもの (新しいアプローチ) が出現したからといって、それで先の仕事に取って代わらせるわけにはいかない。もっとも、学科そのものの守備範囲が曖昧なだけに、その外側の知的興味から利する点が多い。したがって、混合比を正しくすることが課題であるとする。彼としては、この大学独自のカレッジシステムに問題点を見たがっているふしがある。パウイ (M. Bowie) は、マッケイブを含め、カーモード、タナー (T. Tanner) 等のマッケイブ支持者が、それぞれのやり方で、フランスの文学理論に学識のある反応をする雰囲気を作りだしたことは認めるが、このたびの件においては、構造主義は文学批評の一派ではないし、サブ・カテゴリーでもない。したがって、その議論は当然のごとく英文科に属するものでもない。その根拠として、レヴィー＝ストロースの言葉「それは、それ自身、本来の構造分析のためのひとつの候補であるという意味において構造的である」を引く。構造主義理論は文学研究ではなく、人文科学一般の地図を書きかえることを目指すとし、問題を逸らせてしまう。

しかし、スクルートン (R. Scruton) は積極的にケンブリッジのトライポスを擁護して、その正当性を主張する。記号学 (新しいアプローチの一つ) を学問の分野として真面目に考える理由は見当たらないとして却ける一方、批評を論じる際のそのリーダー、対象となる読者の違いを前面にだして伝統を論じる。彼によると、批評は文学の読者に向けてなされるのであって、プロの批評家のためではない。実用主義的アプローチのもとに設立されたケンブリッジ英文科は常にこれを容認し、その読者を統計的規範

ではなく、文化的規範と同一視した。すなわち、コモンリーダーであり、自らのうちに言語の響き、文化の価値、イギリスの詩と散文の伝統と無意識の絆を備えた読者であり、批評はこの読者に語りかける際に、自動的にそれが擁護したあの「偉大な伝統」の配置、再配置に係わりをもつ。それによって、批評は、学問としての地位同様、その客観性と教育的価値も確実なものとなされた、他の人文科学の試金石として中心的な学問分野というわけである。

これは、実は、リーヴィスの目指したとされているものを敷衍し、説きなおしたものにすぎないが、まさにこれを試金石として、当面の新しいアプローチを糾弾するのである。新しいアプローチはケンブリッジ英文学の業績の根底にある‘common culture’への信頼をもたず、その読者は読める程度のものか、仲間内のものであり、「過激派好み」といわれる類の俗物的傾向と、「科学性」、客観性を標榜するが、実は、見解の極端な主観性を隠蔽するために、専門語の使用に頼り、テキストを批評のメタ言語で論じる。それは言説そのものをその主題とする言説を意味するように見え、批評家はコモンリーダーを信用しないだけでなく、自らの言語を話すことを拒否する。実際にはできない。したがって、その批評行為そのものが、真の文学読者とのコミュニケーションを不可能にしている。そのことから、その言語は私的で、恣意的になり、そのメタ言語を共有しないかぎり、読者には理解できない。それに引きかえ、ケンブリッジ英文学が学問の中枢を占めるという主張は、それが語りかけたのは文学の読者の認識できる「理想」であって、神秘の宗教の「大神権」にはなかったという事実に基づくと締め括っている。

以上の要約を見るかぎり、リーヴィスの影ばかりが大きくなるだけという感じである。イーグルトンの言うように、英文学研究が道徳性の中枢を占め、文学研究は社会生活と密接な繋がりをもたねばならないとするリーヴィスは勝利し、今日、英国で英文学を研究する人間は、意識する、しないにかかわらず、「リーヴィス一派」だというのは事実でありつづけるということなのだろうか。新しい批評の流れは、そのテキスト観において、

伝統的批評の前提を突き崩す、あるいは疑問を投げかけるものであるが、留保がつくのは当然としても、葛藤・調和・反撥の過程を辿る前に塞ぎ止められたという印象が強い。一方新しい流れは自ら脱構築を繰り返す方向にあるにしても、伝統的批評保持に固執する人々の言葉（表現）には敵意と揶揄、どぎつさがあり、「異端者狩り」の性急さが感じられる。ブラッドベリーの「我々が文学を読むこと、本を書くことになんらかの道徳性を付与したいのであれば、その力の中心は虚構、特に、事実と見なされている虚構作品を理解する力を強めることにある」。とする意見は当たり前すぎて、逆に傾聴に値する。

参考文献

本来なら、引用した文献および引用個所について、そのつど、その名と個所を明記すべきだが、本論稿のテーマの一つが事件の再現であり、参考にしたものの多くは当時の新聞報道や特集記事であり、記事が重複する上に、論の展開上、時間の順序に従う必要を見なかったので、記事に署名のあるものは、その名を本文中に明記し、文献は特定できるようにした。引用した関連の著書についても同じ扱いをし、引用個所は特に明記しなかった。

引用文献は次の通りである。

- Bergonzi, Bernard *Exploding English* (Oxford: Clarendon Press, 1990)
Chapter 2&3
- Eagleton, Terry *Literary Theory* (Oxford: Basil Blackwell Publishers, 1983)
訳は大橋洋一訳（岩波書店）を借用した。
- MacCabe, Colin. *Theoretical Essays* (Manchester: Manchester Univ Press, 1985.)
'Class of '68: elements of an intellectual autobiography 1967-'81
- Gould, Tony 'The Rebel Barons of Cambridge', *New Society*, 29 Jan 1981.
- Jenkins, Alan 'The Cambridge debate continued', *TLS* Jan 30, 1981
'Cambridge scholars wage literal warfare', *THES*, 23 Jan 1981.
'Aunt Sallies and paper tigers of the revolution', *THES*, 23 Jan 1981.
'Isolated islands of discontent', *THES*, 13 Feb 1981
'Unquiet Flow the Dons', *Newsweek*, 16 Feb 1981.
'Modern literary theory: its place in teaching', *TLS* 6 Feb 1981.
'Let dons delight to bark and bite', *The Times*, 24 Jan 1981.

- Witherow, John 'Talks sought in faculty dispute', *The Times*, 24 Jan 1981.
川崎寿彦。『ケンブリッジの英文学』、『学燈』 vol.81 (1984)
結城英雄 『英語青年』 vol.CXXXVIII No.5 (1992)